

『金山婆拝張王』

Gamsaan Po Bai Chang Wong: A Translation to Modern Japanese

田 中 景

Abstract

This is a translation of *Gamsaan Po Bai Chang Wong* (Wife of emigrant to America prays to Saint Chang), *muk-yu shu* or a vernacular literature of fixed-form poetry written and published in 1920s in both Chinatown in San Francisco and Guangzhou of Canton province. Stories of *muk-yu shu* contain the Confucian ethics of gender moral code so that they are didactic to their readers and audience. *Gamsaan Po Bai Chang Wong* was also a warning to its female consumers that the classic gender roles and family system were being neglected while women's liberation was advocated among some intellectuals. The protagonist of the story is a modernized *gamsaan po* who realizes her vanity and self-centered attitude after throwing away money at Chang Wong's shrine and experiencing a bandit raid.

解題

本稿は、木魚書『金山婆拝張王』（初版、新大陸図書館、サンフランシスコ、1925年・第三版、現象活版社、広州、1929年）¹⁾の現代広東語訳を現代日本語に翻訳したものである²⁾。本作品は、中国広東省開平県の農村の渡米華僑の家に嫁いだ主人公が親類縁者の女性たちと連れ立って張王参詣に出かけ、散財の挙句に盗賊の襲撃に遭遇するという体験をきっかけに、それまでの自身の生き方を反省するという物語である。作品は、サンフランシスコ市のチャイナタウンと広東省広州市で三版まで出版され、双方の中国系住民の間で広く読まれたとされている³⁾。

木魚書は、20世紀初頭には本作品のように、特に女性を対象に同時代の世相を題材としながらその中に儒教的な道德律を説き聞かせる物語が多く出版された。このように木魚書は教育的・啓蒙的な意図を持つものであったが、正式な就学の機会がなく読み書きの出来ない

『金山婆拝張王』

大衆にも理解できるようにと当地の方言である広東語で書かれ、それを識字の者が読み聞かせた。すなわち木魚書は儒者や教育のある者たちが読む正統な文学とは対極のものとして位置づけられ、そのため一般に木魚書の作家は地方の大衆文芸を執筆していることを恥じて名前を公表しないか、あるいは筆名を使用した。本作品の著者も玄虚我生という筆名を用いている⁴⁾。

『金山婆拝張王』の物語の舞台である広東省開平県は、隣接する恩平県、新會県、台山県(1914年以前は新寧県)とともに四邑地域と称され、渡米移民送出地域として知られる。19世紀後半、開平県の農村から借金を抱えながらアメリカ西部州へと渡った移民の多くは、20世紀初頭には郷里の家に多額の外貨を送金して「洋楼」と称される豪邸を建て、近郊の町に市場経済を発達させ、交通網や学校を建設するなど開平県の社会インフラを整備するまでに出世した⁵⁾。

在米華僑たちは、1870年代から80年代にかけて各地でアメリカ人住民による暴行や各種業種からの締め出し、地方行政や中央政府による人種差別的な法制度の制定など様々な排斥や暴力を受けた。それらから逃れるように彼らは各地の都市にチャイナタウンを形成して集住し、主に同胞相手に飲食店やクリーニング店、日用品の小売店などを経営した。ところがこのことが「災い転じて福」となり、特に1920年代のアメリカ経済の好況期には、彼らに安定した収入をもたらす蓄財を可能にしたのである。在米華僑たちは、数年ごとに家族のもとに一時的に帰省する以外はチャイナタウンで働き続け、高齢になると息子や養子をアメリカに呼び寄せて商売を継がせて自身は引退し、郷里の洋楼で隠居生活を送った。四邑では家族を養うためにアメリカへ出稼ぎに行く男性はもともと「金山客」、その妻は「金山婆」と呼ばれていたが、1910年代から20年代にかけてその言葉の意味合いに変化が見て取れる⁶⁾。すなわち彼らは中国の変革期に登場した新興ブルジョアジーとして特別視されたのである。

『金山婆拝張王』には、上記のような1920年代の開平の裕福な移民家庭の暮らしが描写されている。主人公が嫁いだ男性は経済的に成功した「金山客」、ないしはその息子で、財を成すという志を胸に渡米し、チャイナタウンで料理人か洗濯夫として働いている。嫁ぎ先の家は豪華な内装の洋楼で、主人公は高価な消費財に囲まれ、物質的に何の不自由もなく贅沢に暮らしている。彼女もまた名門の出自であることから、当時の「金山客」とは社会的ステータスであり、良家の女子が嫁ぐ相手として望ましいと見なされていたことが伺われる。

また、主人公が張王参詣の道中に立ち寄った新昌の町や張王を祀る神社境内の描写も政治経済システムの動乱期における開平の実態を見せてくれる。そこに描かれているのは、爛熟した市場経済と消費的文化、そしてそれを利用し金儲けに走る人々と消費をむさぼる人々の飽くなき野心と欲望で充満した空気である。しかもこの開平社会の爛熟の原因とは、「金山客」による外貨送金と「金山婆」ら移民の家族による市場での輸入品や高級消費財の購入であり遊興への浪費なのである。

物語は開平社会の爛熟から、作品の中核的テーマである移民家族の道德律の崩壊へと及ぶ。主人公は「何憚ることなく自由に」外出するような、女性にまつわる古い因習から解放された近代的で進歩的な女性を自負し、「女英雄」になることを願っている。また彼女は一家の主婦として金銭を自由に使い、それを女性の躍進の証拠と語るが、実際には自らの生産によって勝ち得た自由ではなく、夫の送金によって付与された恩恵に過ぎないことに気が付いてはいない。

1910年代後半から20年代にかけて、広州や上海などの都市部では「民主」と「科学」をスローガンに封建制度の因習を打ち倒そうという新文化運動が知識人の間で盛んになり、ジェンダーや結婚に関しては親の取り決める伝統的な結婚を打破しようと、自由恋愛や近代家族を中心に様々な議論を展開させた。イブセンの戯曲『人形の家』のノラに倣い、封建的な結婚制度から逃れようと家出する女性たちも現れ、運動を推進する知識人たちに「女性英雄」として称えられた。しかしながら、実際の近代家族は家父長制度を根幹とし、女性には生産能力がなく賢妻良母として家庭に収まることが近代的な女性の役割とされた。特に1919年の五・四運動以降は、ジェンダーや結婚制度の近代化は漢族にとっての救国と結びつく形で発展したこともあり、男女の平等で対等な関係性は議論にのぼっても実現には至らなかった⁷⁾。

『金山婆拝張王』の著者は、主人公の言葉を借りて読者に移民送出地における外貨送金と市場経済の発達のために住民が真摯な生産を怠り、欲望のままに消費に溺れ、挙句の果てに社会の根幹を成す家庭を崩壊しかねないような現状に警鐘を鳴らす。主人公は、自身の自由や幸福までも高額な祈禱やまじないで買おうとしていた己の欲望と無知を恥じ、家庭を守るために姑に尽くし、夫を支える賢妻になることを誓う。さらに真に平等な男女の関係性を実現するための理念として共産主義を提唱する。実際には同時代の開平県を含む四邑は総じて保守的な社会であり、「金山婆」の中に新文化運動を推進するような知識層の女性は皆無に等しかったであろう。しかしながら、地元の新興ブルジョアジーの妻として時流を牽引することを自負していた「金山婆」の中には、近代家族の主婦のイメージを流行として捉え、家庭の代表として金銭を使う自由を無邪気に、奔放に享受する者もいたのではあるまいか。そのような懸念があったからこそ著者は主人公を通して女性オーディエンスに自覚を促したのではないだろうか。

翻訳

『金山婆拝張王』

雄鶏がまだ鳴き声も上げず、月がまだ光亮としている頃、ようやく四更⁸⁾になろうというその時、私はいそいで起床した。まず姑を起こし、湯を沸かし、それから身だしなみを念

『金山婆拜張王』

入りに整えて着替える。

昨晩は張王⁹⁾ 詣でに何人で行くか決めていたのだった——この小路の入り口に住んでいる小母さんと楽母さん、隣に住んでいる二人姉妹のお姉さん、それから蘭ちゃんに菊さん。

その中にはまだ嫁いでいない人もいるけど、それでもお参りには行きたい。誰でも心の中に願ひ事があるのだから、神様に助けを求めるのは至極当然のこと。それに現代は文明の進んだ新しい時代なのだから、何憚ることなく自由に出かけ、軽々と三歩歩み出て¹⁰⁾、通りを飛び出していくことができる。

姑は私に家で鶏を賭殺するよう命じた。それから私は家を一軒一軒、小路一本一本を回って親戚全員に早く起床するようにと促した。私の声はまるで銅鑼みたいにけたたましく辺りに響き渡った。義兄弟の嫁や子どもたちを呼ぶと我が家は人でいっぱいになった。そして互いに手伝い合いながら、皆でいろいろな種類の糕點¹¹⁾ を作った。

私は一人で自分の寝室に入り、鏡を手にとると豪華な内装の食堂を通り抜けた。食堂には塵が積もっていたが見なかったことにして、専ら銀白色の燭台に燈油を注いだ。それから手の中で化粧石鹼を泡立てて洗顔し、金歯を本物の黄金のように輝き、香水とコールドクリームを体に塗り、肌を化粧品で香りて充滿させた。それから私はまた刨花¹²⁾ をいくつか水に浸し、香油を加えてよく混ぜ合わせ、傍らに置いた。

私は玉ちゃんと喜さんと呼び寄せ、最新のお化粧はどうするのか一緒に話し合った。髪をとかして蟻鬘に結び、左側に牡丹の花を一輪挿し、それとお対になるように右側には海棠花¹³⁾ を挿す。顔には点々と薄く紅をさし、白粉を塗ると雪のような肌が一層白くなった。

私は化粧を終えるとあちこちを注意深く見回した。心の中では心配しつつも慌ててはいなかった。誠実であれば清心でいられると古語にもあるではないか。「張王を心から信じていない娘が容貌をきれいにしているわ。」あの齒の抜けた三番目の御婆さんたら憎たらしいいったらない、口を慎むことがないんだから。全く頭がおかしいんだわ。私はこう言った。「貴女方先に行って、それぞれ双子の兄弟に生まれ変われるように神様にお願いしていらしたら。」

髪をとかし、顔を洗って口を漱ぎ、衣服を着替えた後、私は急いで大きな皮箱をあけた。その中に入っているのは、立ち襟の綿クレープの衣装が一着——私が輿入れした時に着た衣装——と、優雅な絹の衣装——惜しいことに胸のところにお酒のシミ跡がある——と、そして花や植物の刺繍が施された裾の長い明るいサテンの衣装だ。三つ目の衣装は去年新昌¹⁴⁾ で日本の新しい布地で作らせたもので、色や刺繍が素晴らしく、まさに清楚で上品と呼ぶに相応しい。私は赤い絹のスカーフを取って肩にかけ、一對の鴛鴦を象った玉のネックレスを付け、十本の指全てに金の指輪をはめた。両手に綺麗な緑色の雲のデザインのついた手袋をはめ、さらにその上に新しい伊梨¹⁵⁾ 産の玉のプレスレットを二対つけ、一對の金の象眼細工を施した古い籐のステッキ、さらにまた以前海外から送られてきた純金の腕時計をはめた。

すらしとした長い裾のズボンも同様に優美なので、絹ガーゼのスカートは可愛らしく揺れて素敵だけズボンの上にあえて穿かなくてもよい。長い絹の靴下の上に新調の革靴を履いて通りを足早に歩くと埃が舞った。三色の帽子が風に浮くようにふわりと頭の上に乗っかり、絹のスカーフが頬をかすめるたびにいい香りを漂わせる。イヤリングをしていないことがかえって清楚で優雅だ。これはつまりは、今日女性が大きく躍進しているということ。

私は一對の新しい竹籠を手にとると、お参りに必要なものを入れた。蠟燭、溪錢¹⁶⁾と長いお線香、十斤¹⁷⁾の肥えた豚肉と鶏肉を一羽、それに酒で煮た鶏と豚の腸。なにしろ王爺は生前食欲旺盛だったのだから、もし食べ物がたくさん用意されていなかったら怒りの眼差しをむき出しにしてカンカンになるに違いない。その時になって幸運をお願いしても逆に禍を招くことになり、家族のために吉祥を祈願するのは望み薄というもの。準備したお供え物の中で一番多いのはお花で三十元くらいしたが、たった一日の収入を捨てさえすれば十分な金額だった。

世間話はこれくらいにして、夜明けの光はあつという間に廟の中を差し込んでいくはずだ。骨折り仕事を恐れることはない、誠心誠意、道を進めばよい。私は急いで家を出ると門の前で薄い霧の帳が澄んだ空を覆っているのを見た。もし今日お参りに出かける必要がないなら、この時点でまた夢の中に戻りぐっすり眠ったことだろう。私は前に進み出ると門に錠をした。頭を上げて辺りを見渡すと目の前に景色が広がった。整然とした庭園には白い梅と赤い桃の花が満開で、さながら団体旅行客のような私たちを歓迎しているかのようだ。

私たちは大きな道に沿って歩き、長橋を通過した。橋の端には千本もの緑色の葉をした柳があり、その一本一本全てが再び春が巡って来ていることを彷彿とさせる。それから私たちは湾を曲がり、曲がりくねった山道を進んだ。山道には花が散り、せせらぎの音を立てる水の中に落ちて流され二度と戻ることなく、谷間には鳥の子の鳴き声が響いている。私たちは再び道を急ぎ、農地の囲いにたどり着いた。可愛い燕の子がつかいになって飛び交っている。互いを追いかけて、慈しみ、慰めるように。人生はまた何のために親しい人と私を離れ離れにするのだろうか。前を向いて歩き続け河辺にたどり着いた。遠くで小さな船が信号を送って帰って来たことを知らせ、ラッパを鳴らして接岸を迎えるよう催促している。それにしても遠くへ行ってしまった私の家族はいつ帰って来るのかしら。私は縁を歩いてあたりを眺めた。その刹那、胸に別離の悲しみが触発され、心の中はもう苦しみであふれそうなことに気づかされる。恨めしいのは同行する人々の無神経にも「どうしたのか」と訊ねて来ることだ。私は実際には口に出すことが憚れるような物思いがあるのを、上手に平静を装いながらその場をやり過ごす。誠実に織姫を演じ、道中気持ちに蓋をして声を出して笑い、目に浮かぶ涙を人前では見せないよう自分を抑えた。

歩き続けていつの間にか新昌¹⁸⁾に到着した。私たちは他人と先を争って河を渡る。私はちょっと帽子を引っ張って頭にしっかりとかぶる。あのごろつきたちに言い値を吹っ掛けら

『金山婆拝張王』

れないために。それから小路の入り口に住んでいる小母さんに先頭を歩いて案内して下さるようにと頼んだ。この小母さんはこの道を一年間に十数回も行き来しているのだ。それに年老いて歩くのが遅い。私たちはこの際のんびりと遊覧することにした。

今日は市場が開かれる日で、街は熱気に満ち、路上では大勢の人々が押し合い圧し合いしている。蘇杭¹⁹ 洋貨の店舗を見れば陳列棚の前には人だかり。貴金属店の中を覗いてみれば眩いばかりの金の器。味噌屋の中を見つめると甘酸っぱい菓子が山積みになっていて、通り過ぎる人々は涎が三尺もの長さ垂れるのを禁じ得ない。それに活気あふれる高い建物を見れば、そこは酒に料理²⁰ に茶に點心の匂いでいっぱい。これは階を上らずにはいられない。

三階に上って賑やかな宴会席を見てごらんなさいな。ほら、あの下品で卑しい人たちの醜態ったら。彼女たちの姿態はまるで妖怪そのものだわ。一歩歩くたびに人の肩に体をくっつけ、口の中にまるで百羽もの雀がいるのかと思うほど騒がしく、四方八方歩き回っている。男はこういう女と一緒に泥沼にはまろうとも何の苦しみもないわね。あら、あそこで話している人たちを見てごらんなさいな、部屋の中でみんな熱心に怪しげなお経か何かを習っていて、あたりはお香の匂いがぶんぶんしている。そこへ銃声の調子良く響き渡る音が伝わってくる。今度はあの人だかりになっているテーブルを見てごらんなさいな、誰かが「あの男は三の紅で負けたんだ、立ち去るとき誰かの服の裾を引っ張って、腕を伸ばして物乞いをしてたぞ」とかなんとか言っているわ。

占いや算命の小屋が道端にずらりと軒を並べているのが見える。「観相」、「正真正銘秘伝の摸骨」などと書かれた看板が見える。あそこに見えるのは歯を抜いてあげて薬を売る人たちね、彼らはまるで銅鑼が轟くような声で叫び声をあげている。漢劇²¹ の役者が軽業を見せ、また旅芸人が洪拳を演じている。子供が新式の西洋鏡に目を輝かせている。抱腹絶倒、笑い転げて腰と背中が曲がりっぱなし。さて、街の光景に吸い込まれたってぐずぐずしてはいられない、お参りに遅れてしまうわ。

東の埠頭まで一路進むと、華やかな衣服を着た女性たちが老いも若きも中年も数えきれないほどの人数を成しているのが見える。誰もが肩に籠を担ぎ、手には長香を一束といろいろな物をどっさり積んだ日本製の鉄鍋を持ち、カラカラと音を立てながら道に沿って歩く。その中の何人かは一対の竹籠に「利涉川」と大きな字で書かれた板や、「平安佑我」と四文字で書かれた板、あるいは「神恩扶佑」と書かれた板を持って神様に返礼に行く。おそらくは神社参詣の一行であろう。歩くほどに人がどんどん増えていく。これなら道を知らずとも心配ない、一同まるで蟬のように列を成して歩く。

利発な蘭ちゃんが誰かの話し声に耳を傾ける。三更時に出発した人たち、それに昨日まだ夜明け前に急いで出発して船に乗った人たちもいる。また、街から遠く離れたところに住んでいるため、ここにたどり着くには五日間かかると計算してきた人々もいる。みんな大きな

声でわいわいと騒がしく喋っている。それにこんなことを話している人たちも。「婦人がこんなに遠くまで歩くなんてけしからん、このメス豚の群れはどんな神経をしているのか知れない、まるで豚籠がひっくり返って騒がしい音を立てているようだ、こんなふうに神様の前で拝みながら不敬なことを言うのだろうよ。」

こういう人たちには犬みたいに吠えさせておけばよい、話にならないのだから。私たち女性の志は日増しに高まっているというのに。ただ悔しまれるのは両足にひどい水膨れができてしまったこと、目の前の未踏の道を延々と歩いて戻らなければならないこと、つまり両足の痛みを堪えながら歩き続けなければならないのだ。するとその時、眼の前に林が現れ緑色の木々から濃い煙が立ち上るのが見えた。あそこが王爺廟に違いない、私の心に歓喜が沸き、足の力がみるみる回復して力強くなった。ただ神様の前で祈願すること、それだけが私の心願なのだ。

目的地にたどり着き、廟の中に進んでいくとあたりは線香と蠟燭の煙で充満していた。男性も女性も、皆まるで蜂のように密集して廟内に集まっている。爆竹を燃やして紙が一尺もの厚さに積もっている。これは神様の五色の衣を拝むために用いたもので、辺りを赤く染めている。周囲の壁掛けには板がかけられている。その全ては神様の恩恵を受けた信者がその恩恵に感謝するためにここに来てかけていった板だった。

私は前に進み出てそっと尋ねた。「元寶²²⁾とお香と蠟燭は一揃えおいくらでしょうか？」傍にいた数人の女性たちが笑って言った。「お姉さん方は知らないでしょうね、ただお部屋で花の刺繍がどうだの、どんな化粧をしたら顔が綺麗になるだの考えている御方には、私たちの廟堂にかかる費用がどうしてこんなに高いのか。幾千両のお金を投じるだけじゃなくて、職員を十数人招かなければならないんですよ。皆さん、アヒル肉をたくさん所望されますし、毎日三食十分な食事を出すのは言うまでもない上に、散髪料や洗剤や石鹸を買うお金やお給料も支払わないと。電気は自分の家で使うので千円ちょっと、もしお金を稼ぐことを考えなかったら誰がこんな仕事をやりましょうか？それに利息だって安くないし、毎月の会合費が二百元、いろんなヤクザに支払う分もあるし。だから皆さんのお賽銭なんかじゃ財政支援にも何もなりやしませんよ。今日、我が家の王爺の靈驗あらたかこの上なし、数ある菩薩の中でも一番、だから元寶にお香に蠟燭のお値段もちょっとは高くなろうというものでしょうよ。等級に分かれていて、それによってお値段も異なりますよ。最高級は銀貨十枚、一般等級は三元、二等級のももとの値段は一元、三等級だとマルボロを二箱いただきます。お姉さん、あなたは誠意で満ち満ちているんだから、ここで幾らか出し惜しみして家の名声を壊しちゃあいけませんよ。もし倍の誠意を以って王爺を拜むんだったら、必ずやお姉さんに篤いご加護がありますよ。」

衆母さんが口をはさむ。「どうしてお宅の廟はこんなに高いのかしらね、多くて一毫三分くらい出せば、たぶん応じてもらえましょうよ。」私はそれに答える。「お気になさらず。私

『金山婆拝張王』

が持っているお金を全部出せばたいしたことありませんわ。」懐から銀貨の筒を二、三個、
滙豊²³⁾の十元紙幣の厚い束、それに目を奪うほど黄金色の、色鮮やかで巧みな仕上がりの
大きな金を八、九個取り出し、それら全部を両手で差し出した。廟祝²⁴⁾の爺やだってちょ
っとは公平でなくては、私たちみんな最高級を買ったんですから、神様の前で女英雄を名乗
るのだから怖いわ。差し当たり願ひ事が長かろうが短かろうが、願ひ事が次々と出て来
ようが来まいが、上手くやれば後でご利益があるというもの。だからと言っていい加減な態
度やごまかしは絶対にいけないし十分に注意しなくてはならないけど。

廟祝は震える手でさっさとお布施をしまい、まるで熊のように大きく口を開けて笑みを浮
かべ、「ありがとうございます、素敵なお姉さん!」と言った。私に向かって何度もお辞儀
をし、楽な靴を履いて神前へと進み、煙草の包みを開いて喉元に吸い込むや否や尻について
將軍神にお出まし下さいと懇願し、板の上に書かれた文言を一遍読んでこう唱えた。「筭
杯²⁵⁾の響き三つ、香一本を將軍神に献上し一同お出ましを請ひ願ひます。貴方様は三国に
一等の牛の種から生まれた、姓は張、名は飛、桃園で三人の兄弟と義を結ばれた御方。容貌
は醜く、腹は大きく突き出し、ただ何斤もの力があるばかり、ゆえに兵を率いて戦で戦った。
大きな浮腫があるようで、働きぶりは凡庸。後世の人々は巴陵橋を壊した話を言い伝えるも
それは作り話、正典には記されておらず。亡くなってすでに長い年月が経ち、骨は皆、虫や
虫と化してしまった。生前この世ではご利益無し、死後またどうやってもご利益を測れようか。
ただこうしてすがって来る私たちを助けて下さる御方。自ら進んで神棍²⁶⁾を語り、貴方様
にこの廟を建立するためにお布施を集め、貴方様を祀っております。拝みに来る善男信女は
皆我に騙された者なり。まさに蛭を用いて烏や亀を餌付けするようなもの、これこそ天地に
つくられた場所。貴方様より私たちにご加護を賜り下され、身体が安康で穏やか、大きく口
を開けて黒米が食べられますように、白米に価格上昇を譲り給え。もし余りが出たら、麻雀
に勝ち、宝くじに当たり、奇跡ともいふべき勝利を手に入れますように。今日参りましたこ
の弟子²⁷⁾は、張だろうが李だろうが、またその他どんな姓であっても誠の心を持つ者なり。
どうぞ香しい鶏の酒煮の味をお楽しみください、食べて飲んで満腹になられたらまた詳しく
お話いたしますよ。」—これは全く滅茶苦茶で何と不気味なことか。

廟祝は神様にお願ひすると急ぎ立ち上がり、こちらにやって来た。彼の眼の縁が赤くなっ
ているのが見えた。廟祝は何やら訳の分からぬことを話していたが、その話は一言たりとも
私の願ひ事とは関係がない。どうやら阿片中毒のせいでもまるで蚊の鳴くような細かい声で話
しているようだ。昔から自分に代わって他人にお焼香を頼むときは流す涙のない人に頼めと
言うのではないか。全くお香と蠟燭の無駄遣いだったわ。もう一度最高級のお香と蠟燭を一揃
え買って奉納しましょう。神様へのお供え物が多すぎて悪いことなどない。私が祭壇の前に
跪いて直接神様に向かって心中にある願ひ事を申し上げましょう。王爺の顕現がありますよ
うに、菩薩様が聞こえないふりをなさるはずがないわ。

「私は郡の中でも名門の家族の出、今年の冬十月には満二十二歳になる者で、十五日酉の刻に生まれました。去年他家へ嫁ぎ、結婚してひと月足らずで夫と離れ離れになりました。私はすっかり喪失感に苛まれ、今こうして貴方様に逐一ご報告をしに参りました。どうか十分なお力添えを賜りますように、貴方様の大きなお慈悲と大きな徳に感謝いたします。」

私はお香を差し上げ、きちんと襟を正すと、誠の心を以って神様にこうお伝えした。「私の夫は大志を抱き、家を離れ、命をかけてアメリカへ渡りました。夫がどのような仕事をしているのか分かりません、おそらくは料理人や洗濯夫をしているのでしょう。どうか夫の仕事が順調に運びますようお願いいたします。どうか夫が安全で健康であるようお護り下さい。夫が妓楼に通い、はたまた私を差し置いて妾を持つようなことを決してしませんように。夫が目標に向かって懸命に働きますように、銀貨をたくさん持って帰ってきますように、家族の面倒を見る男性になりますように、有り余るほどお金を貯めて帰ってきますように、私たちがまた一緒になって再会を喜び合うことができますように、私が再び悲しい思いをすることがありませんように。夫が帰って来て二、三年一緒に住んだら、どうか私に弄璋²⁸⁾と書いた書版を一つ、夫の家の門前に掲げさせてください。」

私は神前に蠟燭を灯して明るくし、併せて兄弟のこともお願いした。「どうか、良い人生でありますように、富と出世と栄華を手に入れますように、望むことは全て得られますように、また名声を得ることが叶いますように。兄や弟が自分の本領を十分に発揮し、一年で十三経を読み終えることができるようお護りください。あるいは師匠のもとで何か工芸を学び、修行の後に知識ある職人に成長しますように。私の姉の夫は今軍政の仕事を兼任していますが、この義兄が出世し、いずこの民も全て義兄の命令に従いますように。一年後には義兄の年収が百万を超えるようになり、姉夫婦が永遠に愛し合い、福、禄²⁹⁾、寿³⁰⁾、財産と大家族を享受することが叶いますように。姉夫婦の息子や娘たちが教訓をよく守り、病にかかることなく、幸せな家庭を築くことができますように。」

私は灰を焼く炉に元寶を三度くべた。「私在家中で一番嫌いな姑、今まで私がやること成すこと全てにケチをつけてきた意地悪な姑。老いぼれてもうろくし、よぼよぼの姑の心をすっかり入れ替えて下さるようお願いいたします。そして私が自由になり、姑の束縛を受けることがありませんように。姑自らが良い意志を心に抱いてこれまでの道のりをきっぱりと断ち切り、心を尽くして私を尊重するようにしてください。どうか私が今世で苦しむことなく、様々な出費に応じられるだけの十分な財産を持ち、毎年一對の雄豚を飼うことが出来て、他の用途のためにへそくりを十分儲けることができますように。この花容月貌³¹⁾が年を経ても色あせることなく、容貌柔らかで愛らしく、色白の膚は衰えることなく、行く先々で他人から嫉妬されたりしませんように。」

神様に願回事全てにご尽力を賜るようにと祈り、その後神様に向かって響頭³²⁾し、一對の筭杯を手にとって地面に落とした。出たの是一对の陰陽、聖杯を成していた。私はすぐさ

『金山婆拝張王』

ま手を伸ばして筮竹の束が入った筒を手を取った。振っても振っても筮竹は出てこない、もうすでに十分間振り続けていた、力を軽くしてちょっと振ってみると、あろうことか筮竹が一塊どっと出て来てしまった。私はそれらを拾って筒の中に差し戻し、また初めから振り直した。偶然にも私の胸の前に一本の筮竹が飛び出した。私はすぐにそれをつかむと立ち上がり、お供え物と一緒に急いで持って行った。

そこへ廟祝が遣わした使いの者がお供え物を受け取りに竹籠二つを手を持ってやってきたことに気が付いた。もともと十斤だった豚肉は三分の二しか残っておらず、鶏肉と甘い菓子は余りがなく、丸々と肥えたガチョウ一羽は半羽になっていた。しかし廟祝は私に何も言わず、ただ礼を述べただけだった。幸いにして私も道中たくさんの荷物を持って帰ることを気にしていたし、重い荷物で腰が弓のように曲がるのを恐れていたのだ。ここは、あなたが全部持っていったとしても文句は言うまい、私の寛大な度量を見せてあげようというものだわ。

それから私は正面門の方へ向かうと、そこには千人も一万人もいようかと思うほどの人ばかりで通り抜けることが出来ない。もし無理やり押しのけて通り抜けようとすれば衣服が何枚か破けてしまうだろう。私は門の前で迎いを見渡した。私と一緒に来た人たちはどこにいるのかしら。左右を見回したが誰も見あたらない。すると突然目の前にいた人たちが声を上げてこう言った。「私たち、ずっと貴女を待っていたのよ、行方不明になったのかと思ったわ。ちょうど犬をつれてそこら中貴女を探していたところだったの。謝礼金付きの尋ね人に出そうかとまで話していたのよ。ちょうど貴女に出くわして幸運だわ、早く帰りましょう。薄暗くなって道を探すようになってはいけないわ。」私は急いで彼女たちを追って人込みの中に入っていき、私のことを心配して探し回ってくれたことに感謝した。しかし私は筮竹を手にしたもののまだ御神籤を受け取っておらず、筮竹が示すところが吉か凶か知ることができずにいた。菊さんはいつもとても歩くのが早い。何と言ってもまだ年若い女の子なのだ。私は彼女に四毫(=0.4元)渡し、御神籤を取って来てくれるよう頼み、始終ちょっと気前良くしていた。数毫の錢を出し惜しんだからといって金持ちになるわけではなく、数毫の錢を気前良く出したからといって困窮するわけではない。菊さんは私の頼みを聞くと歩き出し、急いでまっすぐ棚のあるところへ行くと、慌てて手にした四毫を二仙と勘違いし、御神籤を一枚買って戻りそれを私に渡した。

私は一心に菊さんと一緒に戻ることを念じていたが、ふと振り返るとちょうど廟の門のところ先生が一人座っていて、大勢の人が相談しようと周りに集まっていた。私は先生に教えてもらいたくなり、一緒に来た人々に家に戻るのを少し待ってほしいと頼んだ。そして前に進み直接先生に話しかけた。「これは私がひいた御神籤です、どうか最初から詳しく読んで説明して下さい。どんなに悪い内容であってもまずはお話し下さるようお願いいたします。後で先生にもっと謝礼をお支払いしますが、まずは銀貨一枚をお納めします。」

先生は銀貨を受け取るとかすかに微笑み、それからメガネをかけて御神籤に書かれている

文を読み出した。そこにはこう書かれていた：「烏雲隔絶了月亮，大鳥不往林中帰去。若果浮雲以散去，圓滿的月光會照得滿地黄金³³⁾。」先生は御神籤を読むとかすかに頷き、口髭をひねって私に問いかけた。「これは九番目の中の上の籤です。貴女が訊きたいのはご自身のこと、それとも家畜のことかな。それとも家庭あるいは墓地のことかな。それとも家を出て行った人の消息が無いとかであろうか。それとも庭園の管理に関する事であろうか。考えていることをはっきりと話した方が良く、私が正しい方向に進めるようにじっくりと鑑定しましょう。」

私はちょっと恥ずかしそうに答えて言った。「先生、私がおかしなことを言うなどと怪しまないでください。今私が心の内に抱えている心配事はただ一つ、御神籤の文が私の心中の思いと合っているか否かはまだ分かりません。」先生はただちに御神籤を解説してこう言った。「大きな鳥は空高く飛び、故郷を思うことはない、黒雲が空の月明りを遮断し、どんよりのした天が大地を暗く覆い、陰陽の区別がない。あたかも綿絹の布を硯の近くに置いて黒く染めるように、あたかも蘭を臭い魚の近くに置いて香しい気を失わせるように。残念なことにこの色男の側に良からぬ人がいて、この人を墮落させている。御神籤のお告げは半句違って間違いはない。古の人が説いた孟姜女³⁴⁾のように、その涙が長城を崩したのはまさに哀れの極み、このように鑑定が確かなのは言うまでもない。」

先生の言葉を聞き終えて私はどうしようかと考えた。まるでかち頭を割られたようだった。なぜ人はこんなにも不道德なのか、夫がこれ以上志を捨てないように何かするべきなのではないかしら。

すると二人姉妹のお姉さんが目の前に来て私にこう勧めた。そんなに悲嘆することはない、菩薩様に救いの方法がある、それに先生に相談してどうしたらよいか聞けばよい。私は興奮して言った。「誰かその者を切り刻んで挽肉にしてくれる人はいないものかしら。夫がこれ以上墮落させられることのないように。やってくれるなら家の財産をすべて支払ってもかまいませんわ！」先生はそれに答えて言った。「それは容易なことではない、財産がどのようにあなたを災難から守ってくれるというのか。もし金銭を諦めることで心中の想いが叶うというならば、金持ちの寿命がどれほどに長いだろうか。天は善良な人々を好まれるということを知らねばならない、善良な人々は無限の福を得ることができるのです。それゆえ生き物の命を奪わないこと、自由にしてやることは最も大切であり、書き物を慈しむことは最大の功德、そして努力して功德を積みねばなりません。もっと百解救書³⁵⁾を買いなさい。三日に一度は菜食にし、牛肉と犬肉を慎みなさい。朝晩心を込めて観音様に祈り、閻帝の経典をよく読んで暗記しなさい。毎月一日と十五日は至る所にお香を立てるのもよい。もし以上の話に従い行おうとするなら、仮に百の災厄があっても吉祥に転じることができる。今取り急ぎやるべきことが幾つかあるが、大きく四つに分けられる。第一に、警察官が書いた消災符を一つ、庭の壁に貼りなさい。第二に、張王爺に家の中に来ていただくようお願いし、家の

『金山婆拝張王』

中央に安置して常にお香を差し上げなさい。第三に、王爺の神印令を買い、いつも衣裳の裏側に貼り付けておきなさい。第四に、学者や知識人など教養のある人をお願いして、家書³⁶⁾を一通、ご自分用に書いてもらいなさい。あなたは王爺がこの上なく靈驗あらたかで、その神通力が家書を海外まで送ってくれることを知るはずだし、またご主人の幸福を祈ることもできる。長さ一丈二尺の赤い縄を使って馬の手綱を作りなさい。そうすればご主人は心を入れ替え、いつも貴女を心に思うことでしょう。」

二番目のお姉さんがすぐに反応して言った。「料金はおいくらになりましょうか。少額でもよろしければ、先生に私たちが助けていただきたいのですが。」先生はさっとメガネを下に置き、憤慨して机の縁を叩いた：「何と無知で愚かな婦人だ、この私に厚かましい態度をとる凡人め、この私が徳の高いことを知らないとは。昼となく夜となく書物を学んできた学者なのだぞ。靈符を作ることに關しては、私は未だかつて他人から金銭を受け取ったことはない。古くから伝わる靈符は靈驗あらたかなものだが、子々孫々将来にわたって繁栄を維持するのは至難の業で、私に黄金を千萬両積んだとてそれは腐った山芋に大金を払うのと同じこと。」

小路の入り口に住む小母さんが出て来て先生に作揖³⁷⁾をした。「先生、どうかお怒りを鎮めて私の話をお聞きください。この年若い者たちが先生に不愉快な思いをさせていただきましたが、貴方様には寛容なお心でこの者たちを包容していただきたい。それから貴方様は学識豊富で理性があり、古代の歴史に精通し、孔孟の教えをよく語られ、また他人への接し方も大変お優しい。貴方様が困っている人を見て救いの手を差し伸べないなんて、どうして信じられましょうか。先生、どうか私たちをお助け下さい。」

先生は笑みを浮かべてこう答えた。「御婦人よ、貴女の話は本当に凡人を越えるものだ、ご年配の方は始終事理明白で、分別のない若者の輩とは似ても似つかない。その上この御婦人の徳は高く、品性は純真、善良、かつ他人や物を慈しむ。もし私が今回この方を助けなければ、天は必ずや災いを降らせるでしょう。ですがこのことを完全にやり遂げるには、六百香港元が必要です。このお金は一毫とも私にはではなく、全て廟堂の賽銭箱に入るものなのです。」小母さんが言った。「さて家の女主人がどう言いましょうか。私たち何人かでよく検討してみなければ。家の主人が廉潔なので、銅錢六枚を出し洪っております。」

私はすぐに鞆の中から米ドル小切手を一束取り出し、千二百英ポンド切った。英語で書くのだから中国語の二倍の長さである。「今日は不便なことに銀を持ち合わせておりませんが、ひとまずはお廟のお賽銭箱にお納めください。明日私がもう一度こちらに人を遣わして銀と交換いたします。」

先生は小切手を受け取ると訝しそうに言った。「もともとは一枚の紙、上に書かれた文字は私には全く分かりません。跳ね上がった草や曲がったようなのは鶏の腸のようですな。結局のところ銀が一番良いということになりましょう、どんな所でも村でも通用しますから。」

この小切手では使いにくい、ですがご都合が良いのであればひとまず置いて行かれ、明朝、取返しに誰か人を遣わしなさい。時間をおいてしまって仕事を遅らせることは避けなければ。」

と、先生がまだ言い終わらないうちに騒々しい悲鳴が聞こえ、目の前に一群の強盗が現れた。その数三、五百人、全員が手に自動小銃を持っている。至る所で銅鑼の音や強盗を捕まえるという叫び声が響き渡り、砂塵が舞い上がって私の視線を遮る。恐怖で勇気が挫かれ、半ば死んだような心地がして、何がどうなっているのか分からない。人々は方々に逃げまどい、あたかも肥えた虎や狼が羊の群れを追いかけているかのような光景である。裏の林へ行って避難しなければと思い至るが、これではまるで鼠が身を隠そうとして箱の中に入って行っていくようなもの。廟に向かって逃げようと思い至るが、門が閉じられ、中に入ることができない。田畑に隠れようと思い至るが、一丁の銃がバン、バン、と銃声を轟かせ、二、三人が負傷するのを目撃した。

その時私は同行の親戚たちの側にいることができず、自分が生きのびることだけを考えていた。誰もが皆あちこちに分かれることなく前方に向かって逃げ、息を切らし、汗を飛ばしながら走った。私の頭の上の髪留めは落ち、まとめ髪はばらばらに乱れ、靴や靴下までもが脱げ、着ている衣服は破けてしまった。両脚に力が入らなくなって何度も転び、全身汚泥でびしょ濡れになってしまった。私は助けを求めて千回もの叫び声をあげたが返事はなく、ただ天よ、地よ、お父さん、お母さん、と悲痛に泣き叫んだ。

私はただただ狂ったように走り続け、付近の村にたどり着いたが、村人たちは門をしっかりと閉めていた。彼らは手に銃器を持ち、とても凶暴で、遠くからよそ者の呼び声がすると近づかない代わりに銃を十数発続けて打った。後ろに凶暴な盗賊が相次いで来ていることを誰が知ろうか。この時の私はまさに選択の余地がなく、逃げるができなかった。強いて肥溜めに飛び込んで隠れ、顔中鼻中「金木犀の香り」に見舞われた。この時私の両脚はがたがた震えてなかなか立ち上がれず、ひっくり返っては滑り、この異様な味を味わうことになったが、それでも敢えて泣き声をあげなかった。恐ろしい強盗に泣き声を聞かれればさらにひどい災難に合うのだから、ただただ屈辱に耐えた。今だかつてこれほど惨めな状況に遭遇したことはない。

突如西の山に日が沈むのが分かった。辺りにいた村人は皆静まり、銃を撃つのを止めた。私は静かに歩き出そうとしたが、一步步毎にいつも転び、満身創痕になった。私は振り向かず一目散に走り、ちょうど夜更けになる頃に新昌に着いた。足のつま先は百回も千回も傷を受け、血だらけだった。空は真っ暗になり、おなかが空いた。四更時分になってようやく村にたどり着く。わたしは急いで家の門を叩いた。すると子犬が吠え出し、門を開けて私を家の中に入れてくれた。この時私はまさに死の淵から我が人生へと逃げ返ったのだった。

私はその場に座り込んだが、心臓はまだ怯えていた。ほんの少し前の状況は確かに危険だ

『金山婆拜張王』

ったと回想する。ただ自分が無知だったばかりに一時は無謀になり正気を失ってしまった。よく考えずに勢いに流されて皆が神社詣でに行くのについて行き、本当に菩薩には靈験があると思っていた。第一にはちょっと物見遊山に出かけるため、第二には家内安全を祈願するために。張王が実際には偽物だとは思ってもみなかった。全身木彫りで、白蟻に腕を食べられ自分自身を救うこともできない、まさに自分自身を維持し難いのだ。

去年、張王爺の像が捕らえられたとき、四邑中の新聞がこの事件を報道した。その上、廟の裏に連なる大きな山、強盗が常々通り抜けていた道があるに違いない。張王爺は自分自身の仇を返せないばかりか、逆に強盗に隠れる場所を与えてしまっていた。もうこれ以上張王爺を祀る必要はない、張王爺を捕らえて射的の訓練でもするべきだ。それにしてもあの小さな廟は術策に富んだインチキで人を騙し、張飛というあの死人の名を語り、まさに「蛇鼠一鍋」³⁸⁾、徒党を組んで人を騙していたのだ。そして大勢の人が騙された後に何も言わなくなったのだ。

思えば私はこの一件で衣服に装飾品、そして現金を含めて全部で五千元余りを失い、さらには糞尿を三口ほど飲まされ、もう少しで命までも失うような目に合った。小路入り口の小母さんの亡骸をこの目で目撃し、丘一体は血のりで塗られていた。二人のお姉さん、蘭ちゃんに菊さん、大人子供数人、全員が捕虜にされて連れ去られてしまった。もし不幸にも私があの人たちと一緒に捕まっていたら、私は強盗の暴力にどうして耐えられようか。夫が身代金を払って私を取り戻すことに応じたところで、一体私はどの面下げてこの家に戻れようか。もし夫が私を取り戻すことに応じなかったとしたら、私はこの先ずっと強盗の野営で苦しめられるか、あるいは南洋や香港へ売られて行くかだ。そうなれば私の純潔の誉れ高き一生は台無しになってしまう。今日、私は本当に運が良かったのだ、そうでなければ死を望むことさえもまた成す術がなかったということだ。

今日から始めよう、過去の過ちを正すことを誓おう、女英雄になるなどという考えを改めなければならない。まず勤労儉約に努め、夫が海外で労苦に耐えていることに理解と思いやりを示し、姑に孝順を示して本分を全うし、姑がいつも幸せな笑顔で人を迎えられるようにしてあげよう。また隣人や嫁ぎ先の姉妹と仲良くし、召使を我が身の骨や肉のように心から大切にしよう。

男性にせよ女性にせよたとえ学問をすとしても最も重要なのは、書物の中の道理を軽視してはならないこと、三姑六婆³⁹⁾の胡散臭い推論を信じ込んではいけないこと、また邪悪で不吉なことを信じないことだ。八字⁴⁰⁾に盲目になって従うような人は誰であっても信じてはならない、当たるといふ観相を信じてはならない、言い伝えを信じてはならない、経を唱えて鬼を退治すると言って托鉢する者のことを信じてはならない。またもう一つ信じてはならないのは、家中に祀られている怪しい神々、床下の花公花婆⁴¹⁾。それに竈主⁴²⁾と門官⁴³⁾を祀ってはならない。それが紙に書かれたものであれ木に彫られた偶像であれ、全て

例外なく一掃するのだ。科学研究—音響，光学，化学，電気工学，航空科学—急ぎこれらに専心し従事しなければならない。それに新たに発明された無線電機，これは陸海の交通をさらに便利にし，いち早く環境による制限を打破してくれた。

大同を掲げる共産主義は革命を提唱し，階級間の平等を主張している。労働は神聖で人間の価値は自給自足にあり，ただ夫婦が互いに助け合いさえすれば幸福な家庭を築くことができるのだと。

今の世の中の潮流傾向は学識だというのに，どうして迷信や読経を必要としようか。誤りを乗り越えることに目覚め，帝國的専制を一掃し，自分の自由と幸福を取り戻さなければならないはずだ。それからマタイ福音についてインチキを語る人を真に受けてはならない。ああいう怠けた人たちは太っていて肌の色が白く，さらに彼らが語る天国地獄はインチキで，ぶつぶつと祈禱するが何を言っているのかさっぱり理解できず，でたらめを語っているのは本当に滑稽だ。彼らは不正なやり方で金銭を貯め，要するに詐欺をやっているのだ。

よくわかった。神の名や信仰を利用して他人を騙す詐欺師や牧師が表しているのは，神の名を借りて食を乞い，糊口を凌いでいるということなのだ。彼らは筵杯なんて気にもしてない，気にしているのはただお供え物の豚の頭だけ。それから悪党に加担する連中は，自分に計略があると思って問題の種を蒔き，田舎で善悪の区別なく暴れ回り，盗賊と同様自分の同胞に対して残虐行為をはたらき，ただ他人の毛皮を手に入れて伊達者を気取り，専ら狼藉を働く。彼らの行為は汚く狡猾でよこしま，女郎買い，博打，飲酒，阿片を貪り尽くす。昨今の世の中の退廃は本当に見るに堪えない。私たちは心を一つにして救済に向けて協力し，墮落した風潮を回復するとともに，科学を提唱しなければならない。

私は同胞姉妹の皆さんに一つ忠告を申し上げます。早く目を覚まし，悔い改め，楽土で楽しく過ごし，社会のために方針を定め，教育を興しましょう。そうすれば自然と家の富は榮え，暗闇から抜け出して光の中へ進んでいくことができます。

注 —————

- 1) 『金山婆拝張王』初版，新大陸図書館，サンフランシスコ，1925年；第三版，現象活版社，広州，1929年。第二版の出版社，出版年については不明。
- 2) 中国文学専門家の邵穎容氏，および彭淑嫻氏が作品を原文から散文調の現代広東語に翻訳，その後筆者が現代日本語に翻訳した。この場を借りて，両氏のご協力に心から感謝申しあげる。
- 3) マーロン・ホンによれば，渡米移民の妻を題材とする木魚書の作品2，3本がアメリカの中国人コミュニティで広く読まれていた。Hom, Marlon K., *Songs of Gold Mountain: Cantonese Rhymes from San Francisco Chinatown* (Berkeley: University of California Press, 1987), 47-51.
- 4) 木魚書については，梁培熾『香港大學所藏木魚書収録』，香港，1976年；渡辺浩司，金文京，稲葉明子（編）『木魚書目録』，好文出版，東京，1995年；*Muk-Yu Shu and the Cantonese*

- Popular Singing Art,” *The Gest Library Journal*, vol. II, no. 1 (Fall 1987): 16-30 を参照。
- 5) 移民の送金による地元経済の発展について開平県のケースは、Y. F. Woon, “An Emigrant Community in the Ssu-yi Area, Southeastern China, 1885-1949: A Study in Social Change,” *Modern Asian Studies*, vol. 12, no. 2 (1984): 273-306 を参照。また、台山県のケースは以下の文献が詳しい。Lucie Cheng and Liu Yuzun, with Zheng Dehua, “Chinese Emigration, the Sunning Railway and the Development of Toisan,” *AMERASIA*, vol. 9, no. 1 (1982): 71; Madeline Y. Hsu, *Dreaming of Gold, Dreaming of Home: Transnationalism and Migration between the United States and South China, 1882-1943* (Stanford University Press, 2000).
 - 6) Adam McKeown, “Transnational Chinese Families and Chinese Exclusion, 1875-1943,” *Journal of American Ethnic History*, vol. 12, no. 2 (1988): 73-110; Mothers, Sons and Lovers: Fidelity and Frugality in the Oversea Chinese Divided Family before 1949,” *Journal of Chinese Overseas*, vol. 1, issue 1 (May 2005); Michael Williams, *Returning Home with Glory: Chinese Villagers around the Pacific, 1849 to 1949* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2018); Hsu, *Dreaming of Gold*.
 - 7) 20 世紀初頭中国における新文化運動とジェンダーと結婚制度をめぐる議論の展開については、末次玲子『二〇世紀中国女性史』、青木書店、2009 年；江上幸子「近代中国の家族および愛・性をめぐる議論」、小浜正子他編著『中国ジェンダー史研究入門』、京都大学学術出版会、2018 年を参照。
 - 8) 深夜一時から三時までの時間帯。
 - 9) 三国志の英雄、張飛のこと。
 - 10) いわゆる、女子は部屋から三歩以上出てはならないという古い規範を破るという意味。
 - 11) 菓子やペイストリー。
 - 12) かんなくず。
 - 13) りんごの一種。
 - 14) 浙江省紹興市に位置する県として知られるが、後段に広東省開平県内、あるいはその近県の町として登場することから、後者を指している可能性もある（註 17）。
 - 15) 新疆西北部。
 - 16) 死者に贈る紙製のお札。
 - 17) 約 6 kg。
 - 18) 註 13 を参照。
 - 19) 蘇州と杭州。
 - 20) 通常は肉料理。
 - 21) 湖北省の劇。
 - 22) お供え用の金銭。
 - 23) 香港上海銀行のこと。
 - 24) 廟堂で線香や蠟燭を管理する侍者。
 - 25) 一對の貝型の物体で地面に落として吉凶を占う。
 - 26) 神仏や信仰を利用して他人を騙す人。
 - 27) 侍者自身のこと。
 - 28) 男子に将来玉のような品と徳が備わるようにとの願いを込めて玉の薄板を贈った古い風習から、

息子が誕生することの暗喩。

- 29) 収入。
- 30) 長寿。
- 31) 美貌。
- 32) 地面に額をぶつけること，祈禱の一種。
- 33) 黒雲が月明りを遮り，大きな鳥は林の中へ帰って行こうとしない。もし浮き雲が退散するならば，満月の光が豊かな黄金を照らすであろう。
- 34) 秦朝の民話に登場する女性。夫を探し回りその涙が万里の長城の上に落ちて長城が崩れる。すると中から夫の体が出てきた。
- 35) 大百解。神に幸福を祈願し，災難厄除に用いる。
- 36) 家に宛てた手紙。
- 37) 拳と掌を胸の前で合わせる漢民族の礼法。
- 38) 同じ犯罪組織に属し，共通の目的を持つこと。「同じ穴の貉」。
- 39) まじない師，結婚の仲介人などいかがわしい生業の女性。
- 40) 占いに使われる。
- 41) 一對の老男女の神で，息子を授かるよう祈願する民間信仰。
- 42) 台所の火の神。
- 43) 家の入口で家を守る神。